

和製英語の理解における英語および日本語の語彙知識の影響

— 中国華東地域の日本語学習者を例に —

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 院生 張 婧 禕
名古屋大学大学院国際言語文化研究科 玉 岡 賀津雄
名古屋大学大学院国際言語文化研究科 学術研究員 早 川 杏 子

本研究では、中国人日本語学習者の和製英語の理解に、英語および日本語の語彙知識が、どのように影響しているかを検討した。そのために、歴史的に中国の国際的な経済活動の拠点である中国華東地域（上海周辺）に住む日本語学習者99名を対象に、和製英語の理解テスト、英語および日本語の語彙テストを実施した。英語と日本語の語彙テストの下位尺度をもとに、和製英語の既知度および理解度を予測する重回帰分析を行った。その結果、英語の名詞の知識が、和製英語の既知度を阻害する方向で有意に影響していた。また、英語の動詞の知識は和製英語の理解度に対して促進的に、また英語の形容詞の知識は阻害的に影響した。日本語の知識は、和製英語の既知度および理解度にまったく影響しなかった。さらに、28語の和製英語を階層的クラスタ分析した結果、3つの分類を得た。そして、これらの分類に従って和製英語の特徴を考察した。

キーワード：和製英語、第1および第2外国語、日本語の語彙知識、英語の語彙知識

1. 研究の目的

近年の日本語における外来語の使用は著しく、増加の一途をたどっている（国立国語研究所、2005）。日本語を第2・第3言語として学ぶ学習者にとって、日本語に音韻体系化された外来語は、原語の音韻と異なっている場合も多く、発話（音声）あるいは文字（カタカナ）を媒介して直ちにその原語に対応させることの難しさが明らかにされている（早川・玉岡・金、2011）。国立国語研究所（2005）は、増え続ける外来語の使用に対し、特に意味理解が困難だと思われる用語の言い換えを提案してはいるものの、外来語使用傾向の流れはしばらく続くだろうと予想される。そのような状況下で、日本語学習者にとって、もはや外来語の学習を回避することは難しい。しかし、漢字を用いる漢語や和語に比べ、中国人日本語学習者にとって記憶の負担が大きい外来語学習を効率的に進めるために、原語の語彙知識を活用することができれば、記憶の負担が軽減することが期待できる。

中国語においては、借用語は音訳されるよりも意識されることが多く（郝、2008；那須、1987）、音訳語自体になじみがないという側面がある。外

来語の多くは、英語由来の語である。中国では、教育機関で第2言語に英語を学ぶのが一般的であるので、日本語の外来語のかかなりの部分において、中国語を介さず原語との対応が可能であると考えられる。

しかし一方で、日本語の外来語彙には、「和製英語（Japanized English words）」と呼ばれる外来語が多数存在する。これらの語彙は、英単語を短縮したり、英単語を組み合わせたたりして作られており、英語には存在しない日本語化された語彙である。そのため、和製英語と本来の英語の意味とを取り違え、英語の語彙知識が豊富であることが和製英語の理解をかえって阻害してしまう可能性もありうる。そうした場合、外来語では、英語知識からの促進効果があるのに対して、和製英語の場合は、逆に阻害効果が見られると予想される。日本語を母語としない学習者に対して行われる日本語教育での外来語に対する語彙教育は、和語や漢語に対する比重に比べると、比較的軽視されがちである。日本語教育の現場においては、多くの場合和製英語は外来語の一つとしてカテゴリ化されているに過ぎず、学習者の持つ英語知識によっ

て、和製英語に対する正しい意味への接近がどの程度可能であるのかという点については、ほとんど焦点化されてこなかった。

小林 (2013) は、100本のテレビ・コマーシャルにおける和製英語の使用頻度を報告している。それによると、和製英語は、100本中9割のテレビ・コマーシャルに登場し、1本あたり2語ずつ現れると報告している。100本のテレビ・コマーシャルで使われる全語数(異なり語数)は6,322語で、そのうち外来語は831語(13.1%)、さらに和製英語は181語(2.8%、この数値は筆者が論文のデータをもとに算出)であった。この数字だけ見れば、極めて少数で、取り上げる必要はないと思われるかもしれないが、日常生活で日々放送されているテレビ・コマーシャルに含まれる和製英語が2.8%であると考えれば、実際1日あたり800本ほど流されている(Video Research Comhouse, 2007年の調査, http://www.videocom.co.jp/trend/kiso/ks001_001.html) テレビ・コマーシャルの総数からしても、決して無視することはできないであろう。

柴崎・玉岡・高取(2007)および玉岡・林・池・柴崎(2008)は、複合タイプの和製英語を構成する複合語は、語そのものが簡単であるだけに、組み合わせられた後の和製英語の理解がかえって困難になると報告されている。また、語自体が簡単であるからこそ、それらが日本語において独自に組み合わせられて原語とは異なった意味として使用されるようになって、日本語教育の現場では取り立てられることもなく、見過ごされてきたのだと思われる。そこで本研究では、英語および日本語の語彙知識は、和製英語の理解に対して、どのような影響を及ぼすのかを検討する。

岡本(1997)によれば、英語を原語とする外来語の習得意識と英語学習歴には高い相関があるという。これに従えば、英語学習歴が長い日本語学習者であるほど、英語の語彙からの影響が大きいのではないかと考えられる。そこで、英語知識が和製英語の理解に影響を与えるかを検証するために、長期間英語教育を受けている中国人日本語学習者を調査対象者とすることにした。

中国の上海周辺にある華東地域は、歴史的に海外との交流が盛んで、海外からの言語・文化の受

容も進んでいると思われる。この地域の中国人は、小学校3年から大学まで、英語を第1外国語(または、第2言語)として学校で学習するため、大学入学時点ですでに10年間も英語を学んでいることになる。日本語は、大学に入学してからも学び続けるため、英語の方が日本語よりも学習期間がずっと長い。その意味で、中国人大学生にとって、英語が第1外国語、日本語が第2外国語と言えよう。

そこで、華東地域で日本語を学習する中国人を対象に、日本語と英語の語彙テストと和製英語テストを実施した。英語と日本語の両言語の語彙知識の日本語の和製英語の理解への影響を考察するために、第1に、日本語の和製英語の理解に及ぼす英語と日本語の語彙知識の影響を重回帰分析で検討した。第2に、階層的クラスタ分析で、本調査で使った和製英語の特徴を考察した。重回帰分析は99名の被験者の和製英語の理解に対する語彙知識の影響を考察するため、階層クラスタ分析は、28語の和製英語の特徴を明らかにするための解析手法である。

2. 和製英語の分類と刺激語選択

日本語の外来語に関する研究では、大和・玉岡(2011, 2012)によると、英語から借用した「外来語」の理解においては、日本語の語彙知識ばかりでなく、英語の語彙知識も間接的に、外来語の理解を促進するように機能することが示されている。しかしながら、和製英語の場合は、意味的に英語と日本語とが異なることで、英語の知識がむしろ和製英語の理解を阻害する可能性も考えられよう。

柴崎他(2007)は、和製英語を4つに分類している。第1に、英語として存在するが、英語の意味とは異なる意味で使われるものである。例えば、英語の「smart」は頭が良いという意味であるが、日本語の「スマート」は体形が細くて見た目が良いという意味になる。第2に、英語の単語を変形、あるいは短縮して作られたものである。例えば、英語の「department store」は、日本語では短縮されて「デパート」になる。第3に、英単語には存在しないが日本語の中で使われるようになった外来語である。例えば、日本語の「ナイター」は英語では「night game」であり、そのような英単

語は存在しない。第4に、実際に存在する英単語を組み合わせることで、英語にはない新しい意味を表すようになった合成語である。例えば、「モーニングサービス」は「喫茶店などで、午前中にする割引メニュー」のことを意味する。

和製英語で最も多いのは、第4の種類である。さらにいくつかの例を挙げると、「ペーパードライバー」という複合語タイプの和製英語がある。それは英語の「paper」と「driver」の組み合わせであるが、「paper driver」という複合語は英語には存在せず、「運転免許を持っているのに、あまり運転できないこと」を意味する。しかし、英語の知識の豊富な日本語学習者にとっては、「運転手の形をした紙人形」とか、「新聞配達をする人」とか、「新聞をよく読んでいる運転手」とか、かえって多様な意味を想定してしまう可能性がある。「ペーパードライバー」に関して、意味的に近い英語表現としては、「Sunday driver」が当たる。本研究では、最も数の多い第4の複合語タイプの和製英語に焦点を絞って検討することにした。本研究で使用した和製英語は玉岡等(2008)および柴崎等(2007)の論文に使用された調査項目から28語を選んだ。この28語の複合タイプの和製英語を選択した基準としては、第1に、和製英語を構成する語彙は国際交流基金・日本国際教育協会が出版した『日本語能力試験出題基準』(旧)「語彙」に掲載されているものを選ぶようにした。ただし、「ダイヤルイン」の「イン(in)」などのような前置詞、「マナー」、「ペース」、「ウェイ」などは含まれていないため、実際に構成する単語の内31語(すべての語彙数は58語)が出題基準に掲載されている。第2に、『パーソナルカタカナ語辞典』(1999)、『広辞苑』第五版(1998)、朝日新聞に使われた語彙の印刷頻度を調べたところ、選択した28語の複合タイプの和製英語は、日本語の和製英語として存在する。この種の和製英語は、語を構成する個々の単語が簡単であるだけに、英語知識から推測すると誤ることが多いと予想される。

本研究は、以上の目的から、次の2点を明らかにする。1つ目は、英語および日本語の語彙知識は、和製英語の理解に対して、どのような影響を及ぼすのか。2つ目は、英語には無い新しい意味を表すようになった複合語タイプの和製英語(第

4の種類の外來語)は英語知識からの推測は和製英語の理解の障害となるかどうかである。

3. 調査方法

3.1 調査対象者の学年と年齢

本研究では、中国華東地域にある上海の4年制大学で日本語を専攻とする2年生(44名)、3年生(36名)、4年生(10名)および大学院生(9名)の合計99名の日本語学習者を調査対象者とした。これらの日本語学習者に日本語と英語の語彙テストと和製英語の理解テストを実施した。99名の調査対象者は、最年長は25歳と11ヶ月であり、最年少は15歳と6ヶ月であった。平均年齢は20歳と8ヶ月、標準偏差は1歳と7ヶ月であった。

3.2 調査対象者の英語能力

本研究において調査対象とした中国華東地域の大学で学ぶ日本語学習者は、小学校3年生から英語を第1外国語として学び始める。大学入学時点ですでに10年間英語を学習している。また、英語は大学入学試験の試験科目でもあり、本調査を実施した大学に入学するためには、英語能力がある程度高くなくてはならない。さらに、大学入学後も英語を2年間勉強する。調査対象の大学の2005年の2年生(1年半くらいの大学での学習)の統計では、中国の全国大学英语試験であるCET4級には、77.7%が合格している。この年の中国の重点大学の平均合格率が54.6%であったことを考えると、23.1%も高い結果であった。日本語よりもはるかに長く英語を学んでおり、さらに大学入学後も引き続き学び続けることを考えても、英語語彙知識は豊富であり、その意味で、英語が第1外国語であると考えられよう。

3.3 調査対象者の日本語能力

中国教育部が制定した『高等院校日本語專業基礎段階教学大綱』(中国教育部, 2001)および『高等院校日本語專業高年級段階教学大綱』(中国教育部, 2000)によると、1, 2年生は、基礎日本語、会話、日本語聴解、日本事情、新聞講読、日本語概説などを基礎日本語教育として受ける。3, 4年生は、上級日本語、会話、作文、古典文学、翻訳(通訳を含む)など専門としての日本語の教育を受ける。1年では、日本語クラス学習時間(1クラス時間は45分)は476時間で、2年では、884

時間と定められている。本研究の対象となった大学ではもっと長く、1年で504時間、2年で1,080時間である。また、ほとんどの学生が、4年生終了までに、新日本語能力試験1級に合格する。短期間で、日本語能力が向上することが分かる。しかし、それでも学習期間の違いから、本調査対象者にとっては、英語が第1外国語であり、日本語は第2外国語であると言えよう。

3.4 調査内容

中国華東地域の日本語学習者99名に対して、以下の3つのテストを実施した。

3.4.1 日本語の語彙テストの内容

日本語の語彙知識を測定するための語彙テストは、宮岡・玉岡・酒井(2011)から借用し、四者択一の形式で、名詞、動詞、形容詞、機能語の四つの下位分類を持ち、各分類につき12問である。1問1点で、満点48点である。例えば、「彼女はどんなに大変なときでも、()ひとつ言わずに病人の世話をしている。」という文の内容にふさわしい単語を、(1)「語句」、(2)「苦難」、(3)「不評」、(4)「愚痴」という4つの選択肢から1つ選ぶ問題である。ここでは、(4)「愚痴」が正答である。ただし、本研究では、調査の目的に照らし、機能語を含めない三つの下位分類の36問の項目を使用した。宮岡他(2011)が中国で行った調査(調査対象者281名)では、この語彙テストのクロンバックの α 信頼度係数は0.74で、内部一貫性は高かった。これまでに、木山・玉岡・趙(2011)、玉岡・宮岡・金・林(2011)、斉藤・玉岡・母(2012)でも、中国語や韓国語を母語とする日本語学習者を日本語能力によって弁別する目的でこの語彙テストが使用されているが、信頼性係数は、それぞれ $\alpha=0.89$ ($N=224$)、 $\alpha=0.88$ ($N=78$)、および $\alpha=0.85$ ($N=113$)といずれも高い。今回実施した日本語の語彙テストでは、機能語の12語を除いた36語で、クロンバックの α 信頼度係数は、0.77でかなり高い数値を示した。

3.4.2 英語の語彙テストの内容

英語の語彙知識を測定するテストは、日本の実用英語技能検定1級と準1級レベルの練習問題から借用して、名詞、動詞、副詞、形容詞という四つの下位分類からなる。問題はすべて四者択一の形で30問を設定した。1問1点の配点で、満点は

30点である。この英語語彙テストのクロンバックの α 信頼度係数は0.85で、非常に高かった。

3.4.3 和製英語テストの内容

和製英語の理解を測定するテストは、既知度と理解度という両面から測定するテストである。柴崎等(2007)に使用された30問のうち、玉岡等(2008)が同様の項目を用いて日本語母語話者に対して行った和製英語に関する理解度調査では、「ホームドクター」と「テーブルセンター」の正答率が7割に満たなかったことが報告されている。日本語母語話者でさえ理解度の低いこの2つの語は、日本語学習者ならばさらに理解が難しいであろうと考えられたので、検討の妥当性の観点からこれらを外し、本研究では、玉岡等(2008)が使用した28問の和製英語で調査を行った(配点は各問1点で満点は28点)。これらの問題の四者択一の選択肢をすべて中国語に訳し、中国語での選択肢を調査対象者に提示した。まず、当該の和製英語を知っているかどうか、「知っている」または「知らない」と書かれた空欄に「」マークを付けてもらい、次に、四者択一の選択肢から和製英語に対する正しい解釈を一つだけ選ばせた。例えば、「ドクターストップ」であれば、(1)「医生的罢工(医者へのストライキ)」、(2)「医生的拜访(医者への訪問)」、(3)「保健医生为了运动员的健康, 示意停止比赛(医者が健康のために試合などを止めさせること)」、(4)「因交通堵塞而无法动弹的医生(交通渋滞で動けない医者)」という4つの選択肢があり、ここでは、(3)が正しい答えとなる。

4. 分析方法および結果

4.1 各テストの平均および標準偏差

99名の調査対象者にした3種類のテストおよび各テストの下位分類の満点、平均、標準偏差、最高・最低点は、表1に示した。調査対象者である99名の日本語の語彙知識の得点の平均は23.61点で標準偏差は4.90点(各下位分類の得点の平均および標準偏差は、名詞では $M=8.77$, $SD=1.77$; 動詞は $M=7.78$, $SD=2.08$; 形容詞は $M=7.06$, $SD=2.08$)であった。最高得点は36点、最低得点は11点であった。英語の語彙知識の得点の平均は23.59点で、標準偏差は4.81点であった。最高得点

表1 日本語および英語の語彙テストの平均と標準偏差

下位分類	満点	平均	標準偏差	最高点	最低点
日本語語彙知識	36	23.61	4.90	36	11
名詞	12	8.77	1.77	12	3
動詞	12	7.78	2.08	12	2
形容詞	12	7.06	2.08	12	2
英語語彙知識	30	23.59	4.81	30	8
名詞	9	6.96	1.63	9	0
動詞	10	8.04	1.84	10	2
形容詞	5	4.18	0.94	5	1
副詞	6	4.40	1.25	6	0
和製英語知識	28	19.19	2.82	26	11

注: N = 99.

は30点、最低得点は8点であった。和製英語の得点の平均は19.19点で、標準偏差は2.82点であった。最高得点は26点、最低得点は11点であった。

4.2 重回帰分析の結果

和製英語の既知度(すでに知っているかどうか)と理解度(正しく理解できているかどうか)に対して日本語語彙知識あるいは英語語彙知識のどんな品詞が影響しているかを検討するため、和製英語の既知度に対し重回帰分析を用いて検討した。

4.2.1 和製英語の既知度の予測

日本語と英語の語彙テストが持つ下位分類の品詞の得点の平均で和製英語の既知度を重回帰分析で予測した ($R^2=.25$)。結果は、表2に示した通りである。日本語の語彙知識の品詞は、いずれも和製英語の既知度と理解度に有意な予測変数とはならなかった。それに対して、英語の名詞の

知識が有意な負の予測変数となった ($\beta=-.38$, $p<.01$)。つまり、英語の名詞の知識が、和製英語の既知度を阻害する方向で有意に予測した。これは、本調査に用いた和製英語の組み合わせには、名詞がもっとも多く含まれており、名詞に備わっていた2つの要因が影響したことが有意な負の予測変数となったと考えられる。1つは、前項と後項の語の組み合わせによる意味関係である。「ベッドタウン」という語の場合、ベッド (bed) と町 (town) という単義を英語の本来の語義で組み合わせても、「都心に近い集合住宅地」という意味を類推することはなかなか難しいと思われる。他にも、「チャイルドシート」は、中国では車に乗る際に子どもの安全を確保するためのシートベルト付きの座席は一般的ではなく、「子ども用の席」から想起される意味は、飲食店などに用意されている子ども用の椅子である。そのため、child seatからは、運転中に赤ん坊や幼児の安全を守るためのシートという意味を想起しにくい。英語でもこのような座席は baby car seats と表現され、child は使われないことから、この語の正しい意味への推測は難しかったであろうと考えられる。このように、前項と後項の2つの語は、英語を基準にした語義による組み合わせで考えた場合に、意味的に成立しにくいものが多い。そのため、こうした日本語独自に生成された意味の組み合わせによって構成された名詞を含む和製英語は、英語の名詞の語彙知識によって有意に阻害される要因となっ

表2 日本語と英語の語彙知識による和製英語の既知度と理解度の予測

変数	既知度			理解度		
	β	t 値	p	β	t 値	p
目的変数						
和製英語						
	$R^2=.25$			$R^2=.15$		
説明変数						
日本語の語彙						
動詞	.20	1.76		.05	0.38	
名詞	.15	1.34		.06	0.55	
形容詞	.19	1.60		.07	0.56	
英語の語彙						
動詞	.10	0.72		.36	2.33 *	
名詞	-.38	-2.82 **		-.11	-0.75	
形容詞	.18	1.58		-.31	-2.47 *	
副詞	.12	0.94		.18	1.29	

注: N=99. * $p<.05$. ** $p<.01$. R^2 は寄与率, β は偏回帰係数, p は有意確率を示す。

たと考えられる。

2つ目に、和製英語に対する正しい認識が教授されていないということも影響している可能性がある。上述したように、実際の教育現場では、和製英語は外来語の一種としてカテゴリ化されているにとどまり、和製英語がどのように造語化されるのかについて説明を受けることは、ほとんどないようである。そのため、学習者は外来語を、「外国からの借用語」という認識で受け取るため、和製英語はもともとの英語語順規則 (SVO) あるいは、英語の名詞と接続する規則に従って形成されていると考えてしまい、英語での名詞の接続規則に則って推測した結果、誤推を誘引し、和製英語の理解が阻害されたと思われる。

4.2.2 和製英語の理解度の予測

日本語と英語の語彙テストの下位分類で和製英語の理解度を重回帰分析で予測した ($R^2=.15$)。結果は表2に示した通りである。日本語の和製英語における理解度に対しては英語の動詞 ($\beta=.36, p<.05$) と形容詞 ($\beta=-.31, p<.05$) の知識が有意な予測変数となった。英語の動詞は、和製英語の理解を促進するのに対して、英語の形容詞は阻害する方向の影響であった。それは和製英語を理解する際、「オープンカー」の「オープン」は、英語の動詞である「open」であり、動詞は和製英語で使われても大きく意味が変わらないために促進的に影響したと考えられる。一方、「シルバーシート」の「シルバー」の形容詞「silver」などのような複合語タイプの和製英語では、形容詞の場合、英語の本来の意味とは異なる解釈で使用されるものがあり、こうした形容詞は、もとの英語の語義から和製英語で用いられている意味を類推することが困難であったと考えられる。「シルバーシート」は、高齢者や身体が不自由な利用者のための席を区別するために、銀色の生地が用いられたことから定着した和製英語であるが、英語では、silver がこのような概念を指すことはない。日本語学習者が英語の silver の概念を基準に類推したとすれば、「お年寄り優先の席」という意味に到達することはかなり難しいことであろうと思われる。

以上のような2つの重回帰分析の結果から、日本語の語彙知識は、和製英語の既知および理解には影響しないことが分かった。一方、英語の和製

英語の既知度には、動詞が促進的に影響し、名詞と形容詞は阻害する形で影響していた。動詞が促進的に作用したのは、英語の原義とそれほど意味が変容せずに使用されていたものが多かったからだと思われる。それに対し、名詞や形容詞は、もともとの英語の意味を変えて日本語で独自に使用されるようになった語彙が多いため、英語の語彙知識がかえって和製英語の意味の推測を阻害することとなったのであろうと考えられる。

4.3 和製英語28語の階層的クラスタ分析および結果

28語の和製英語は、理解度と既知度についてどのような特徴が見られるのであろうか。28語の和製英語の特徴を階層的クラスタ分析の手法で考察する。階層的クラスタ分析は、最も類似した調査対象を自動的に集めて同じグループに分類しながら、次第に大きな階層構造を持つ集合を作っていく探索的な統計手法である (小塩, 2007; 石川・前田・山崎, 2011)。28語の和製英語について、99名の中国人日本語学習者による理解度と既知度の得点の平均を使って、階層的クラスタ分析を行った。

クラスタ間の距離はウォード法、和製英語の距離は平方ユークリッド距離を使用した。28語の和製英語に対して行った階層的クラスタ分析の結果、25ポイントスケールの12ポイントで切ると、3つのクラスタが得られた。さらに、正準判別分析によって、階層的クラスタ分析による3つのクラスタの判別の良さを交差妥当性で検証した。判別分析を行った結果、正判別率は96.00%であった。つまり、今回の階層的クラスタ分析で得られた3つのクラスタが96%正しく分類されたことが確認された。この分類の結果は図1に示した通りである。

図1のように、クラスタIには「モーニングサービス」、「ミスコンテスト」、「ニューハーフ」、「ワンルームマンション」、「デッドボール」、「タイムサービス」、「ワンパターン」、「マナーモード」、「シルバーシート」、「チャイルドシート」、「ペアルック」、「ポケットベル」、「ドクターストップ」、「ペーパードライバー」、「モデルルーム」、「オープンカー」の16語の和製英語が分類された。クラスタIIは「マンツーマン」、「ダイヤルイン」、「ベッドタウン」、「レースクイーン」、「スキンシップ」、「ツーショット」の6語である。クラスタIIIには「ハイウェイ」、「ゲームソフト」、「アフターサービス」、

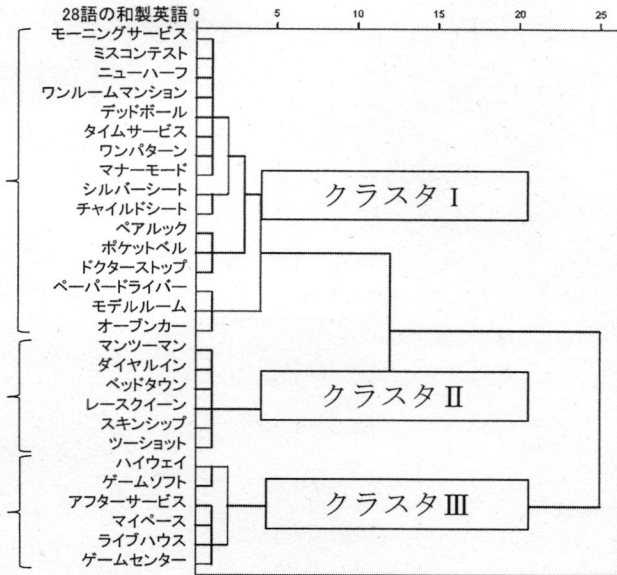


図1 28語の和製英語の理解度と既知度についての階層的クラスタ分析のデンドログラム

注1：理解度と既知度の平均を使って、28語の和製英語を階層的クラスタ分析で分類した。クラスタ間の距離はワード法で、和製英語の距離は平方ユークリッド距離を使った。
注2：階層的クラスタ分析による分類は25ポイントスケールの12ポイントで切って、3つのクラスタを得た。

「マイペース」、「ライブハウス」、「ゲームセンター」6語が含まれた。

さらに、28語の和製英語の既知度の平均を横軸に、理解度の平均を縦軸にして、階層的クラスタ分析の分類結果をプロットして図2に表した。プロットリングを通して、3つのクラスタに分けられた和製英語に関する特徴が見て取れる。

図2のプロットリングに示した通り、クラスタIIIは既知度も高く、理解度も高い和製英語のクラスタ、すなわち「理解容易」な和製英語である。例えば、「ゲームセンター」は、正しい英語表現としては「video game arcade (center)」あるいは「amusement arcade」であるが、「ゲームをするセンター」という英語知識から十分に推測が可能であり、実際に和製英語になっても意味のずれが小さい。

クラスタIIは、クラスタIIIとは対照的に、既知度も理解度も共に低い和製英語のクラスタである。すなわち、「理解が困難」な和製英語とも言えよう。和製英語を構成する両単語、「two」

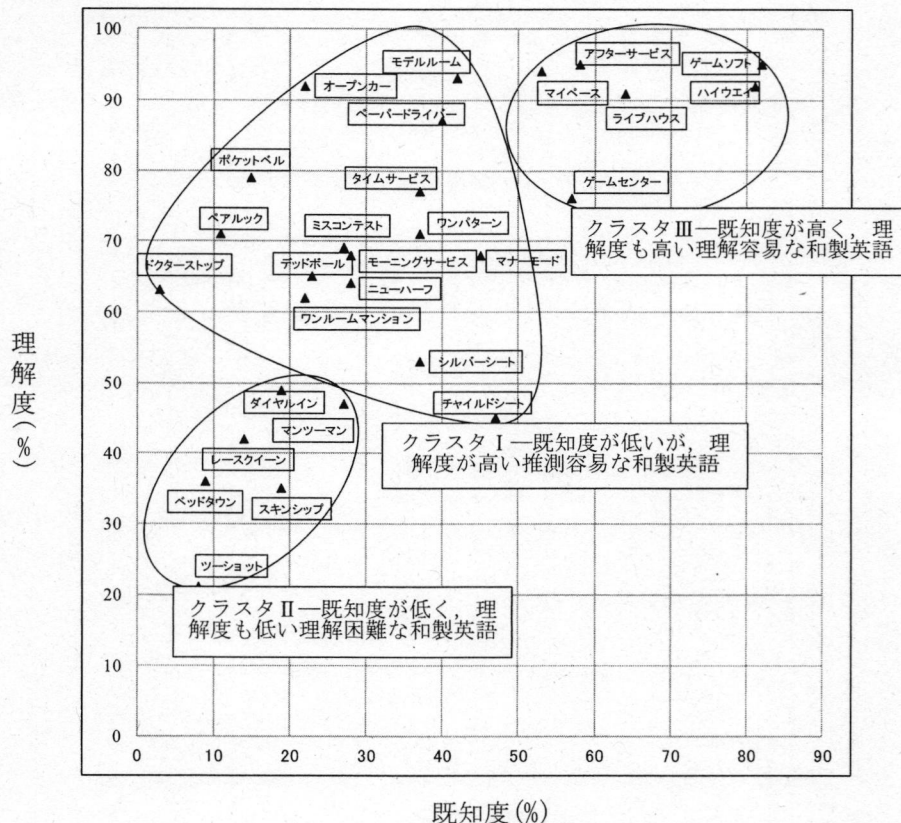


図2 28語の和製英語の理解度と既知度のプロットリング

注1：理解度と既知度の平均を使って、28語の和製英語を階層的クラスタ分析で分類した。クラスタ間の距離はワード法で、和製英語の距離は平方ユークリッド距離を使った。
注2：階層的クラスタ分析による分類は25ポイントスケールの12ポイントで切って、上記の3つのクラスタを得た。
注3：横軸は既知度の平均、縦軸は理解度の平均である。階層的クラスタ分析の分類結果をプロットして示した。

と「shot」, 「bed」と「town」, 「skin」と「ship」の英語の意味と和製英語が表す意味がかけ離れているため、理解が難しかったのだと思われる。

クラスター I には、最も多くの和製英語が分類された。既知度は高くないが理解度は高い和製英語のクラスターである。つまり、「推測可能」な和製英語と言えよう。この中には、柴崎他 (2007) が指摘したように、一つの和製英語を意味的に二分でき、前部は後部を修飾して、後部は意味的主要部になるようなものが含まれている。例えば、「モデルルーム」「ミスコンテスト」「オープンカー」などである。クラスター I に分類された「ドクターストップ」の既知度は調査対象の28語中最も低かった。にもかかわらず、理解度は60%以上であった。これは、英語と和製英語の意味がある程度類似しているため、正しい推測に導くことができたからであろう。

5. 総合考察

本研究の目的は、中国華東地域の日本語学習者を対象に、和製英語の理解における日本語および英語の語彙知識の影響を明らかにすることである。結果は、以下のように要約できよう。

第1に、和製英語の既知度と理解度には、日本語の語彙知識は影響していなかったが、英語の語彙知識からの影響が見られた。既知度に関しては、英語の名詞の知識が、和製英語の既知度を阻害していた。また、理解度に関しては、英語の形容詞と動詞の知識が和製英語の理解度に影響することがわかった。英語の動詞の知識は和製英語の理解を促していたものの、英語の形容詞の知識は阻害していた。和製英語の理解に関する研究では、柴崎他 (2007) は、アメリカ人 (英語母語話者) の日本語学習者にとって、和製英語の意味が推測し易い語と推測し難い語があることを指摘している。推測し易い和製英語は、後項の語が複合語である和製英語全体の意味の主要部となり、前項の語が後項の語を修飾している場合である。例えば、「ワイシャツ」(「white shirt」), 「フルコース」(「full course」) などである。一方、推測し難い和製英語は、英語の語順規則に従わず、英語の意味概念から外れており、前項も後項も和製英語の主要な意味を示さないような「テーブルセンター」(「table

center」) や「ツーショット」(「two shot」) などである。本研究の結果もそれを反映しており、和製英語は、英語と日本語との統語的・意味的な違いが強く影響していた。

和製英語の既知度には、英語の名詞の知識が阻害するように影響することが重回帰分析で明らかになったが、クラスター分析においても、「理解困難」クラスターに属する「ベッドタウン」や「スキンシップ」などのように名詞を含む和製英語の既知度が極めて低かった。これらの和製英語を構成する「ベッド」(名詞の「bed」) と「タウン」(名詞の「town」), 「スキン」(名詞の「skin」) と「シップ」(名詞の「ship」) は、英語の単語として実際に存在するが、組み合わせて複合語にしたときに、英語の名詞の意味と大きく食い違ってしまう。そのため、英語の名詞の知識は、和製英語の既知度に対して負の影響要因となっていた。一方、和製英語の理解度においては、英語の動詞の知識は促進的、英語の形容詞の知識は阻害するように影響した。借用した英語が動詞である場合には、和製英語において意味的に大きく変容されない。しかし、英語の形容詞では、日本語の意味からかけ離れた意味で使われる傾向にある (例えば、「シルバースーツ」「デッドボール」など)。そのため、英語の形容詞の意味から和製英語を推測するのは難しくなる。

第2に、和製英語の理解度と既知度で、28語の和製英語を分類すると、「理解容易」, 「理解困難」および「推測可能」という3つのクラスターに分けられた。これらには、語構成と意味において、以下のような特徴が見られた。「理解容易」クラスターの和製英語は、それに対応する英語の単語や表現形式と類似性が比較的高く、英語の語彙知識から推測が容易である。「理解困難」クラスターの和製英語は、2つの英語の単語の意味関係が和製英語と意味的に外れており、また英語の文法規則にも従わないものである。「推測可能」クラスターの和製英語は、修飾部と意味的主要部が構造的に明瞭であり、長い英語の学習歴を持つ日本語学習者にとって、意味的に推測し易いことが分かった。

第3に、日本語と英語の語彙知識の影響関係が、和製英語の理解と外来語とは異なることがわかった。大和・玉岡 (2011, 2012) では、外来語の理解は、日本語の語彙知識から促進的に、また

英語の語彙知識からも間接効果として促進的な影響が見られていた。和製英語と異なり、外来語の場合は、英語から借用した語であり、たいいていの場合、英語の意味と大きくかけ離れていないことが多いためであろう。しかし、本研究で対象とした和製英語は、特に名詞や形容詞の英単語を中心に、日本語特有の意味を伴って使用されているものが多く、英語の知識からの影響は、名詞や形容詞が含まれる和製英語に対して、むしろ阻害的に働くことが示された。

本研究では、日本語教育において中心的に扱われてきた語彙ではなく、周辺的な和製英語という種類の語彙を扱った。和製英語は、通常的外来語と違い、英語知識がそのまま適用できないタイプの外来語であるが、外来語の一種であり、正しい日本語の語彙である。近年、外来語は、音楽、ファッション、スポーツ、コンピュータの分野で頻繁に使われ、その使用頻度は高まる傾向にある。その中で、ジャンルに特有な和製英語を含む外来語の種類も増えている。こうした語彙は、特定ジャンル内で関連した意味的ネットワークを持っているようである。意味的ネットワークを駆使することで、多様な語彙が学び易いと言われている。それならば、日本語学習者の興味やそれに関連した背景知識が、ジャンルに特有な和製英語を含む外来語の理解に強く影響するのではないかと思われる。まずは、ジャンルごとのそのような意味的ネットワークを想定して、学習者の背景知識と外来語の理解の関係を明らかにしたい。さらに、ジャンル別に日本語学習者が学ぶべき外来語を判定して、日本語教育の現場における語彙学習に反映していけるような研究に発展させたい。また、本研究では、第4の種類の和製漢語に焦点を当てたが、今後はそれ以外の種類の和製漢語についても検討し、引き続き和製漢語の習得の様相を明らかにしていきたい。

参考文献

岡本佐智子 (1997) 「外来語の習得ストラテジー：中国で学ぶ中国人研究者に見る外来語の中間言語（中国赴日留学生予備学校1995-96年度博士班初級日本語学習者から）」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』23, 97-109.

王伸子 (2011) 「中国語母語話者の日本語外来語

彙習得に関する諸問題」『専修人文論集』88, 1-15.

石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2011) 『言語研究のための統計入門』くろしお出版.

郝苗苗 (2008) 「中国語における受け入れの概要」『人間文化研究』6, 1-7.

木山幸子・玉岡賀津雄・趙萍 (2011) 「外国語としての日本語 (JFL) の語用論的能力に関わる基礎的言語知識—中国語を母語とする日本語学習者を例に—」『言語教育評価研究』2, 2-14.

小林善久 (2013) 「TVCMにおける和製英語のパイロット調査—文字テキストと音声テキストの対照を軸に—」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所, 117-126.

小塩真司 (2007) 『SPSSとAmosによる心理・調査データ解析—因子分析・共分散分析まで—』東京図書.

斉藤信浩・玉岡賀津雄・母育新 (2012) 「中国語母語話者と韓国語母語話者は条件文「ト」をどのように理解しているか」『九州大学留学生センター紀要』20, 1-9.

柴崎秀子・玉岡賀津雄・高取由紀 (2007) 「アメリカ人は和製英語をどのぐらい理解できるか—英語母語話者の和製英語の知識と意味推測に関する調査—」『日本語科学』21, 89-110.

陣内正敬 (2008) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11, 47-60.

玉岡賀津雄・林炫情・池映任・柴崎秀子 (2008) 「韓国語母語話者による和製英語の理解」『レキシコンフォーラム』4, 195-222.

中国教育部高等学校外語專業教学指導委員会日語組編 (2001) 『高等院校日語專業基礎段階教学大綱』大連理工大学出版社.

中国教育部高等学校外語專業教学指導委員会日語組編 (2000) 『高等院校日語專業高年級段階教学大綱』大連理工大学出版社.

那須清 (1987) 「中国語のなかの外来語」『語学研究』10, 79-91.

早川杏子・玉岡賀津雄・金秀眞 (2011) 「音声から書字への転換とその聴解への影響—英語から日本語に借用された外来語の韓国人日本語学習者の書き取りを例に—」『日本學報』87, 69-

80.
堀切有紀子 (2012) 「英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識・感情・行動と異文化受容態度との関連」『人間文化創成科学論叢』14, 187-195.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2011) 「日本語語彙テストの開発と信頼性—中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価」『広島経済大学研究論』34 (1), 1-18.
- 大和祐子・玉岡賀津雄 (2011) 「日本語テキストのオンライン読みにおける漢字表記語と片仮名表記語の処理：中国人日本語学習者の語彙能力上位群と下位群の比較」『小出記念日本語教育研究会論文集』16, 73-86.
- 大和祐子・玉岡賀津雄・初相娟 (2012) 「中国人日本語学習者による外来語および漢字語の処理における学習期間の影響」『ことばの科学』23, 101-119.

Effects of Japanese and English lexical knowledge on comprehension of Japanized English words:
A case study of Chinese students learning Japanese in the eastern China region

by

Jingyi ZHANG

Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

Katsuo TAMAOKA

Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

Kyoko HAYAKAWA

Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

The present study investigates the effects of Japanese and English lexical knowledge on comprehension of Japanized English words. Three tests of Japanese words, English words and Japanized English words were administered to 99 Chinese students learning Japanese in the eastern China region who have studied English since Grade 3 (10 years prior to university education), much longer than Japanese. Multiple regression analyses, predicting scores of Japanized English words by scores of Japanese (noun, verb, and adjective) and English (noun, verb, adjective, and adverb) lexical knowledge tests, indicated that English knowledge hindered the participants' familiarity of Japanized English words, while English verb knowledge enhanced, and English adjective knowledge impeded understanding of Japanized English words. Furthermore, based on the familiarity and comprehension scores of Japanized English words test, a cluster analysis grouped 28 Japanized English words into three clusters. The detailed characteristics of these clusters were reported.

Keywords: Japanized English words, first and second foreign language, Japanese vocabulary knowledge, English vocabulary knowledge